

風土文化の深化と産業地域の革新：地場の変動と時 空の変遷

宮川，泰夫
九州大学比較社会文化研究院

<https://doi.org/10.15017/8674>

出版情報：比較社会文化. 12, pp.1-18, 2006-03-20. Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

風土文化の深化と産業地域の革新

— 地場の変動と時空の変遷 —

Localization of the Culture in the Regional Climate and Evolution of Industrial Region

— Local Dynamic and Transformation of Locus —

宮川 泰夫

Yasuo MIYAKAWA

ABSTRACT

When considering the evolution of industrial region, we should pay more due regards to the localization of the culture in the region. With the growth of economy, the economy of status exerts more influence on the innovation of industrial technology and arts and the evolution of industrial region, than the economy of speed, the economy of scope and the economy of scale in the market and in the society. The increased productivity based on the economy of scale and the economy of scope enabled the mass production and mass sales, which urged the expansion of the industrial orbit on the global scene and, in turn, the taking much care of local cultures for development, production, management and sales in the international market. Even in the liberalized and standardized world market beyond the national barriers, it is important to pay more attention to the local culture for systematizing the production system, especially in the training of workers such as Kanban (Just-in-System) and Soi-Kufu-Teian (propose and practice of original and creative idea). Those are the twin wheels for mastering the modern Japanized production system of Toyota Motor, improved in the traditional Japanese cultures, Monozukru (manufacturing with spirit) and Mottainai (complete use of the material and cultural value). These cultures are developed by the traditional Japanese innovative thought that the human beings should develop the heaven-sent and natural value of material as much as possible. In this sense, the natural providence and the human ethics become more important than ever especially in the era of mutation as a result of opening of Neo Industrial Revolution driven by the environmental industry and the welfare industry. The environmental and the security technology and thought developed by Toyota Motor gradually transferred into its regional orbit, the Tokai automobile industrial area based on its iconography.

This localization of culture with technology enabled the modernization of local industry to be the core industrial area in Japan on the global scene, such as the Sansyu roof tile industry and the Okazaki stone cut industry. The feedback loop between local traditional industries and modern industries in this region cultivated the innovative thought; the recycled textile industry along the Yahagi River and the original strategic thought of shougi (Japanese chess) developed by the local lord, Oda who reunified Japan. The three distinguished leaders that ended the civil wars encouraged not only the chess but also the tea ceremony. The tea ceremony generates the calm and the artless ethos and climate that become more important than ever in the stressful society and the long life society. It innovated the traditional ceramic industry, together with the automobile industry by the sharp design and the advanced technologies toward the global design center in the global market and society, paying due regards to the environment and the ecological life beyond the capitalistic world market and society.

1 はじめに一文化の風土と地場の産業一

文化は、価値体系と深く係り、人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果を意味し、衣食住、技術・学問・藝術・道徳・宗教・政治等、生活様式の総体を意味する。狭義には、文化は人間の内的精神生活に深く係る側面を表徴し、技術的物質的所産としての文明に対峙し、文明の表層性・皮相性に対し根源性・統一性を持つ。文明は、生産手段が発達し、生活水準が上がり、文教が進んで人知を明らかにすることを意味する。文明開化は、人権尊重と機会均等が実現する運動過程を内包し、文化は文徳で住民を教化する側面を包含した。文化と文明は、生産・消費の両面で、社会・市場を媒体に産業革新の原動力、源泉をなす。

風土は、自然と人間が合成した土地柄を意味し、外的営力を表徴した風と内的営力を意味する土の接合面をなす。これは、気候と地形に留意し、人間と文明が醸成した環境を地域化した、景観に表徴される。景観は、外面的景観だけでなく内的景観を内包し、内的景観構造を規定し、表層的外面景観に顕現する風水とも深く係る。風水は、外界から吹く営力としての風と内面を循環し、外界との媒体をなす営力である水を意味するだけでなく、陰陽道における土地、墳墓の価値と位置を占い定める術をも意味する。風土と風水を結ぶ概念が水土である。水土は、内的営力としての土と循環営力の水を重合し、土地柄を体現した自然環境だけでなく、仏教思想を表徴し、人体を構成する根源をも意味する。風土、風水、水土を貫く、人間の価値は、営力論、景観論、環境論に加え、文化論の視座でこれらの概念を吟味することで、風俗として掌握できる。風俗は、社会集団の生活上の慣わし、風習、容姿、生態を表現し、風土、風水、水土を相互に規定する。

風習、風俗は、都の有職故実に凝集され、人形に表徴されるが、鄙の農村美術運動で山本鼎が北欧、露西亜より導入し、日本化した小木工・人形の変遷にも顕現した。自動車でも、これは、初期に日本で組み立てられ、文金高島田の嫁入りに用いられた観音開きの乗用車にも顕れた。風土と文化の饋還関係は、地場の産業の存在形態を規定し、規模や範囲、速度に替る風格の経済の源泉に培われる。風格は、味わいと人品、趣と人柄を意味し、風土、文化の両面から価値を創造する源泉をなし、経費の削減に対する価値の付加を産む。風格の経済は、鑑賞と鑑定を通して信用、信頼を得、社会、市場で価値を付加し、付加価値を活かして、技術による生産性、効率性向上と藝術による充足感、存在感を高め、取引市場で卓越した信頼性を向上させるだけでなく、交換社会で稀少性を発揮し、価値を増幅してゆく。トヨタ自動車が戦後、双久会を通して、フィランソロ

ピー、社会文化貢献運動で育成し、美術工芸和紙産地への転換を促がした源泉は、藤井達吉の総合藝術運動にあったが、原動力はこの社会文化貢献運動が培った風格の経済であった。半世紀を経てトヨタ自動車が米国、カナダでの成功と韓国での試験を経て、日本市場に導入したレクサスブランドも、トヨタブランドと差別化する原動力は生活様式とも係った風格の経済にあった(図1-1)。

自動車産業に典型的に顕現した規模の経済は、社会と市場における多量の需要に対応し、量産量販体制による経費削減と係り、地場、広域、国内、国際、世界、地球と市場の規模を拡大し、ガリバー型寡占構造を構築させていった。範囲の経済は多様な社会の価値と多岐の市場の需要に対応し、規模の経済で削減した経費を活かした多岐多様な商品開発を可能とし、自動車産業を革新した。社会の文化と市場の風土に係り、生活の様式よりは生産の様式を深く配慮した規模と範囲の経済に対し、速度の経済は、生活と生産を結ぶ取引と流動の速度が生む経費削減と付加価値が齎す社会と市場の変質に係り、生産・消費・流通・処理の地球規模化に伴い、革新機構が拠って立つ地場を変動し、活動の時空を変遷させる。

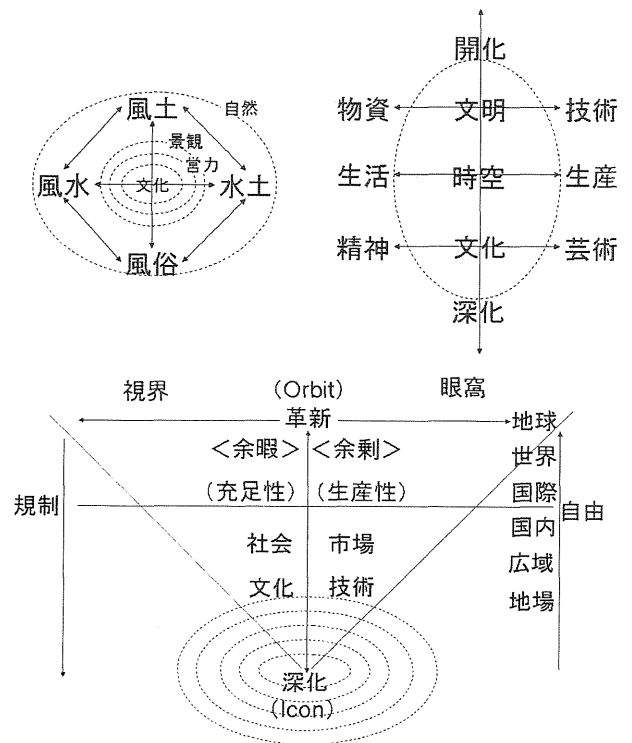


図1-1 文化の圍繞と地場の変動

出所：著者作成

地場産業は、本来地場の資財、資本、労働、技術を組み込み、地場の社会を媒体に捕弼機構の安定化機構を培い、産業地域社会を基にしてきた。地場産業も、地場の市場から広域、国内、国際、世界、地球と異なる段階の社会、市

場を掌握し、資財、資本だけでなく、労働、技術をすら地場から乖離させつつ、地場に中枢機構を置き、意匠、技能を支えに風格の経済を育み、地場の変動と時空の変遷に適応してきた。その反面、地場の変動と時空の変遷は、東京、大阪の地場産業を確立しながらも、戦時経済体制の体制的再編制、高度経済成長期の構造的再編成を経て、革新した地方産地を、世界の主産地とした。鯖江の眼鏡枠産業や市場構造の変遷に適応した戦時疎開の吉田工業は、その一例である。これは黒部を中枢に国際中堅企業に成長し、巨大都市の地場産業を衰微させた。主産地の風土に地域化された文化の深化は、地場に深く係って存立する産業の革新を地球規模で生む原動力をなしていた。

本論では、風土文化の深化と産業地域の革新の関連を風格の経済に留意し、地場の変動と時空の変遷に配慮し、拙論での分析を踏まえ、革新の機構を論究してゆきたい(図1-2)。

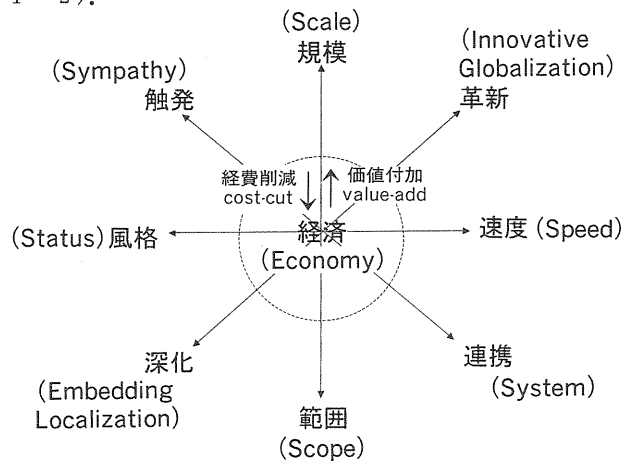


図1-2 風土文化の変化と産業地域の革新の原動力
出所：著者作成

2 都鄙の工芸と文化の表徴

都は、中枢・管理機能の中心であるだけでなく、文化・厚生機能の中核をもなし、その基礎には金融・決済、消費・流通の市の機能がある。都の機能と市の機能を同期、相乗し、軋轢を緩和し、相克を克服する情報の機能が都市の基軸をなす。都は、産業革新機構を内包し、農林水産の1次、工鉱建の2次、消費流通の3次、中枢管理・金融決済・サービス・情報の4次、文化教育・厚生環境の5次の産業を時間軸・空間軸で5次産業化に向けて産業構造を変革してきた。5次産業化は、革新機構における原動力として、大都市地場市場における規模の経済による経費削減効果、多様・多岐の階層と需要を持つ大都市社会・市場における範囲の経済による商品開発軋轢と劣後商品の経費削減努力、風格の経済による先端商品の付加価値増大を活かした。急激且つ短期の需給変動、金融決済の変質への即応が生む速

度の経済は、流行に即応し、革新を持続する感応、調整、自働安定化の捕弼機構と連動し、革新を促進してきた。5次産業化は、流通経費の削減だけでなく開発経費の削減をも可能とした大都市の接遇環境が魅了した革新人材の厳しい鑑定、鑑賞能力の向上が齎す。市場の鑑定、社会の鑑賞能力は銘柄の確立を産む源泉をなし、風格の経済を絶えず涵養している(図2-1)。

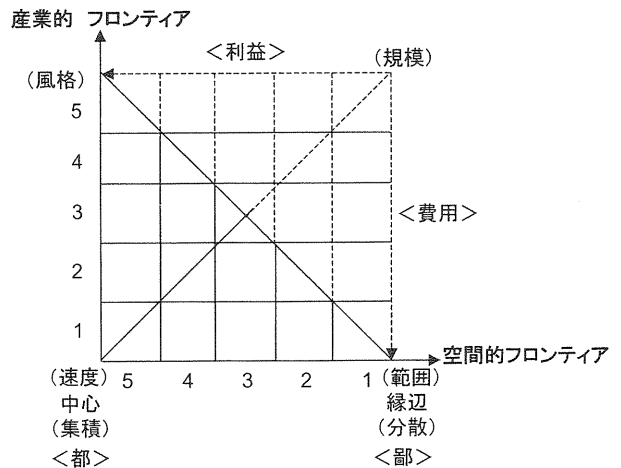


図2-1 都市の基盤と産業の革新

出所：著者作成

日本の都は、風水の思想、文化を自然に摂り込み、飛鳥、大和、奈良、京都と空間的にも、時間的にも、それらを凝集し、地域化し、風土化した。都は風土文化を深化し、風格の経済を育み、大都市圏と大都市の社会と市場を活用し、時間的・空間的拡大と産業的・経済的拡充で、5次産業と他部門とを共棲させ、共生をも産んだ。都の伝統工芸は、この象徴・アイコンであり、5次化した産業、商品を連結し、伝播する技術・技能・意匠・情報の同期、相乗を齎す経済をも表徴している。京人形が、縮小均衡しつつ、高度化する5次産業の象徴であるとしたら、京鹿野子絞りは、広域化し、国際化した生産体系の構築、内外の連結の経済で、自らの風格の経済を育み、存続する伝統工芸の象徴である。

伝統工芸の中枢性は、中枢管理・文化厚生の都の機能と表裏一体をなす。なかでも、産業革新機構を確立し、産業革新を可能とする革新資源、即ち、技能・技術・技法・技巧を備えた職人の供給と伝統的原材料を供給し、時代の変化に即応した代替材料を供給しうる原材料問屋が不可欠である。産地の成熟に伴い、広域、全国、海外市場に販売する製造卸や職人自らが加工し、工夫して来た道具、機材等関連分野が充実する。風格があり、風雅の漂う意匠の革新を担う製造卸、産地問屋、関連職人、鑑定人も、開放型産地構造への移行に伴い、産地革新の重要な原動力をなす。

都は、風格、風雅を鑑賞し、鑑定する人材を魅了する。都には、革新、存続に不可避な内外の最低市場を醸成する

社会、市場の規模を擁し、それぞれの原材料、市場、社会の分野にあって、有職故実に詳しい人材も存在し、範囲の経済を培う中で、伝統と革新を相生する機構を育んできた。都の寺社は、天皇家、公卿衆に代わって、鑑定の人材を供給し、箱書きで銘柄を確立させ、市場の中枢性を涵養し、美術館や博物館等、鑑賞の場所をも提供してきた。文化・厚生、中枢・管理の機能が集積した都の企業のフィランソロピーも、伝統工芸に留まらず、意匠産業の革新に大きな影響を与えてきた。また、鄙に生まれた総合芸術運動、農民美術運動も、都の同好の社会や百貨店等の消費流通機能を活用することで、産業の革新を全国的に誘発する原動力を培ってきた。

伝統を内包した都の革新の風土は、革新機構を作動させる人材の交流・研鑽、多様・多岐な関連部門での革新技術・技法・技巧・技能の触発効果に加え、意匠や商品開発による直接作用による革新状況(milieu)を醸成してきた。都における分野、部門を超えた内外の人材交流の仲間社会は、地域化し、近接して仲間が居住する地域社会、中でも、同業者街や産業地域社会を育み、それらが革新気風を培ってきた。そして、都の産業地域社会の担い手が、革新精神を涵養する源泉をなす。革新風土・状況・気風・精神の革新環境は、革新機構の外部環境だけでなく、内部環境として、革新機構の主導者・組織者・調整者・支援者にも作動し、革新を円滑に促進する媒体をもなしてきた。

革新環境の涵養には、革新場所としての都だけでなく、都の出先として、都に体系的に組み込まれた辺境・前線(frontier)や都に至る陸海の道筋、街道と宿場、海路と港町、本末の寺社の門前町の体系も大きな役割を果たしてきた。革新場所の体系は、革新経路に沿って、革新文化、思想が伝播し、思想・文化を担う主体の交流、力量を培養することで保持、強化される。革新方向・方針を感知する自動的感応機構、革新資源を業者と地域の間で増幅する資源の構造的饋還機構だけでなく、主体的軋轢、構造的疲労を緩和、解消する自動安定化機構、革新機構を円滑に作動させる気風・状況の革新環境を醸成し、産業、地域の革新を促す産業、社会の均衡・安定を地域に産む構造的調整機構は革新機構を輔弼してきた。なかでも、多岐多様な同業者街や産業地域社会、産地問屋、原材料問屋の存在は、人流・物流の革新回路の整備とあわせ、文化の深化と産地の革新を促す自動安定化機構の重要な要素をなす。自動安定化機構は、自己学習能力を具備した柔軟な自動安定化構造を内包し、主体の絶えざる事前緩衝、事後回復の力量向上に留意した人間とシステム、人機一体の自律的安定化機構を意味する(図2-2)。

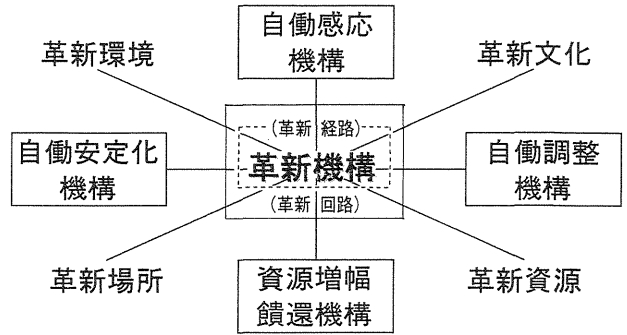


図2-2 革新機構の構造

出所：著者作成

伝統工芸のなかでも、人形は「ひと・かた」として、人間の風俗、風習と深く係り、都にあって、風雅を志向し、風格の経済を産業革新の原動力とした。人形は、京都、伏見、江戸のような都の産地と徳川との関連の深い、雛人形、雛具の静岡、岩槻や、大藩の城下町文化の深化と関係の深い堤人形、博多人形の町の産地に加え、木と土を素材とし、地場の趣向を源とした鄙の産地を展開している。有職故実を基幹とした都の人形も、風俗、風習の動きに反応する感応機構が流行に乗りつつ、風雅を失わずに革新してゆく。都の人形は、ひいなやほうこを原形に、紙や布を素材に女兒の遊具として誕生し、道具や御殿等を備え、公卿の生活文化を深化し、都の大衆に伝播する媒体をなし、両者の間の饋還関係を増幅してきた。この増幅饋還機構は人形の文化、風俗を深化し、聖人が後世に残したい良い流儀や雅に美しく飾った作り物としての風流を培い、都の流行を絶えず生み出す。これは流行を肌身で感じて自動的に組み込み、革新を調整する機構を培い、革新資源の変質と革新環境の変動を、自動的に安定化する機構をも育んだ。

鄙の人形も、町や都の鑑賞、鑑定能力によって、付加価値をつけ、命名と銘柄によって趣味社会を超えた。こけしのように、高度経済成長期に趣味市場で地位を確立することで、人形文化を深化しつつ、地場を越え、広域、全国、海外市場で、卓越した美観を育み、人形産地を革新してきた。人形産地は、低成長期に入って需要が低迷する中で、宅配便やインターネットを活用した新たな流通経路構築と新商品開発で風格の経済を涵養し、商品を差別化しつつ、産地を縮小均衡し、残存産地を共棲させた。

京都の有職故実に詳しい面竹、面庄の屋号に表徴される能面師や仏師からの参入、西陣や友禅のハギレ屋等関連業の存在が京人形に革新環境変動に即応する産業地域構造的な支持基盤を与え、革新主体を涵養した。都の陶製人形では、鄙の博多人形産地からの伏見を経た清水への人形師移住に表徴されるように、都の接遇環境が産地革新に果たした役割は大きい。鄙の改良された量産・量販技術の導入は、需

要構造の変動に対応した庶民需要を基礎市場とすることを都の産地を存続させた。これが規模と範囲の経済に加え、流行に即応する速度の経済と流行を先導する風格の経済を原動力として、都の人形産地を革新した。このことは、都鄙の連環を革新人材と技術伝播に留意し、都の接遇環境、革新環境と、革新機構本体との関連を論究する上で、重要な視座である。

都の伝統工芸産地は、有職故実に象徴される伝統の堅持だけでなく、規模の経済と範囲の経済を活かし、生活様式の変化を契機とした地場の変動、市場の変質に対応し、多様な産地の技術、技法、技巧、意匠の開発で生産様式を革新してきた。西陣に遅れて都の京都で発祥し、17世紀に宮崎友禅齋が確立した京友禅は、その典型例である。京友禅は、幕府に対する政治経済政策として文化振興、工芸革新に務めた百万石の城下町金沢、徳川幕府の拠点江戸、儉約の徳川吉宗に対峙した徳川宗春が導入した両者の中間の親藩名古屋に、職人や問屋を通して導入され、時空の変遷と地場の変動が育んだ風土文化を表徴する工芸産地の萌芽を育んだ。これらは、織田、豊臣、徳川を経て、北陸の文化拠点となった加賀国染め技法を取り入れた加賀友禅や幕藩体制の確立に伴った新都で、挿し、蠟、無線描の技法を確立した江戸友禅、伝統的な砦の培った堅実な中にも京、金沢、江戸の技法、技術、意匠をこなし、独自の友禅を培った名古屋友禅と、都の革新環境の中で、産地を革新し、共棲の機構、体系を培った。明治維新で、時空を変革した、京都は、激変の中で、伝統産地の中枢性を覚醒し、京都舎密局の出入り職人広瀬治助が発明した写糊の技術を活かした型紙友禅を開発し、庶民化した一般量販市場に対応する体制を作り、産地存続の機軸とした。第2次世界大戦後は、型紙に替え、スクリーン捺染を友禅に導入し、京友禅の量産技術、技法を導入した鄙の友禅産地に対抗し、範囲の経済と消費者に近接した速度の経済を活かし、多様多岐な友禅を編み出し、風格の経済を覚醒し、石油危機以降の着物需要の衰微に対応し、手書友禅を蘇生し、都の中枢性を強めた。

染色と織物は、生活必需品における付加と価値に関する根源的問題を提起した。素材と技法、技術と技能に加え、技巧と意匠は、機能と美観、「用の美」と「美の用」を根本的に論究する上で、適切な対象をなす。「用の美」と「美の用」は、革新環境の基層をなす風土と産業地域構造の変動の場をなす状況(milieu)に深く係る。風土と状況を異にする都と鄙においては、生活、生産の実態と構造に即して、経済と文化を考察してゆく上でこの関係は興味深い。都は、多様な「用」を基礎に多岐に亘る需要を満たす範囲の経済が活かされる風土を擁す。この反面、規模の経済を基にした経費の削減は、「美」的価値の付加を許容し、容認する余

地と余裕を都に産み、機能美や構造美を超えた装飾美、藝術美を創造させる状況、気風を涵養してきた。都は、19世紀の耽美主義に表徴される美的革新思想を培養し、美的文化を長期間に亘って培った。これは革新環境を構成する革新精神と同期、相乗し、美の創造者、藝術家に、現実的「用」を満たして来た工芸品、民芸品への関心を高めさせ、風格の経済と高尚な需要による「美の用」を実現させ、美的充足と実用価値を兼備した美的産業の革新を可能としてきた。鄙の風土は、鄙の文化を涵養し、渾然一体となった風土文化を培い、多くの場合、地場の素材を活かし、伝統的技術、技法を源とした独自の工芸を生み出して来た。鄙で卓越した銘柄を確立し、都の好奇心の強い鑑定家が発見して来た民芸品は、町の工芸品や都の美術品に匹敵するものは多くない。都の好事家の鑑賞、蒐集の対象に留まり、都の工芸品、美術品に昇華したものも少なく、それは鄙の限界を露呈した。

紙や布、木や土を素材とした人形は、大半は趣向品で、生活、生産と直接係わる必需品ではないが、日常性が強く、都・鄙の風土、文化を素直に表徴している。これは、玩具、民芸、工芸、美術の領域に亘り、地場、広域、全国、海外の市場を育てて来た。人形は、単なる玩具と異なり、人形としての身代、厄除けの形代等の宗教的側面をも有し、地域文化のアイコン、価値の享有の象徴をなしたものも少なくない。焼成した土人形は、縄文時代から存在し、腐食する木、紙、布を素材としたものと異なり、人形文化の両面を探求し、産業化過程を論究するのに適した。大規模陶磁器産地、瀬戸のノベリティーは、輸出商品開発と西洋文化導入が結実したものであるが、洋食器同様に本国製品を品質だけでなく、美観でも上回ったものが少なくない。伏見、京、博多人形等、伝統と創作が絡み合った美観を生む日本人形も、その美術的価値を高めてきている。しかし、彫刻に比べ塑像は、産地のなかにあってその域に達したものは、都の産地でも少ない。

木彫は、仏像、仏具等宗教用具と関連し、早くから美術品、芸術品の域に達した。鋳金が一般化して後も、仏師の美観を表現し、素材の美を活かしやすい木彫は、優れた人形の原型をなし、都の仏師、面師から人形師に変じた者も少なくない。鄙では、木地師から人形師、こけし工人に転じたものも多い。鄙のこけし工人は、町の収集家の鑑賞、鑑定、評価、購入によって、次第に土産物市場における風格の経済を培い、美観を向上してきた。こけしの商品化と深く係った温泉地の規模と温泉客の集客圏は、規模、範囲、速度、風格の経済の重合する大規模産地の鳴子と遠刈田、弥治郎、白石、蔵王の蔵王山麓に展開する中小規模産地等との共棲を可能とした。それだけでなく、土湯と中の沢に見られる時空の変遷と美観の向上は、木地師の血縁、地縁

の育んだ産業地域社会と旅芸人の隈取を取り入れた中ノ沢のこけしに典型的に現れ、外来文化の受容を表徴した。

趣味の生活は、剰余の配分と余剰の分配の機構と深く係る。余暇の確保は、生活と生産の軋轢の緩衝、構造的疲労の回避による自動安定化機構の一部もなし、経済の円滑な革新に不可欠な要素をなした。趣味と実益の重合は、社会的に一般化し、商品の市場性を確立した趣向品では、充足性と生産性を均衡させ、資源、環境の増幅機構を活用し、基礎需要を増大させ、付加需要を多様化し、範囲の経済を作動させる基礎条件を培い、需要の高度化を産む風格の経済の作動範囲を拡充した。風格の経済の根源をなす風土と文化、革新と深化の関連は、両者を合成、統合した風俗・風流と風土・風習を一体化し、可視的、心理的眼窩 (orbit) をなした風景と風流の源泉をなす文化の深化を表徴した風雅 (icon) に顕現している。茶道の確立と封土に匹敵した茶会、茶器、茶筌等の茶道具の発達は、この関連を政治経済、社会文化構造を踏まえて分析してゆくのに最適である。

戦国武将織田信長と深く係り、発生初期には、軍略の実益、英知の研鑽、叡智の練磨、即応の鍛錬の道具とされながらも、次第に趣味の頭脳的遊戯として確立したのが、将棋である。将棋は、印度に起こり、遣唐使や入唐僧を通し、中国、朝鮮を経て伝来した。大将棋、中将棋に替え、小将棋に中将棋の飛車、角行を加え、戦国時代から江戸時代にかけて日本将棋は確立し、西方に伝播したチェスに対峙した文化を作り上げた。将棋の技で代々江戸幕府に仕えた、大橋、大橋分家、伊藤の家柄は、将棋所とされ、将棋文化の頂点に位置し、将棋文化深化のアイコンをなした。武士から町人に、江戸から大阪に、全国に広がった、会所の開設や縁台の将棋は、風土文化を深め、風俗、風景の重要な要素をなした。20個、2組の将棋駒と81の升目を持った将棋盤は、白黒16個、縦横8桁で、将棋と異なり捕り駒を使えないチェスに比べ、具象性、装飾性は薄く、文字の書体や駒の素材に凝り、抽象性、銘柄性が高く、多層の将棋文化を反映した。この風土文化が大衆用の安価な将棋と職業用、趣向用の高価な将棋を並存させる構造を作り、都の江戸と大阪、難の新潟と天童を棲分けた。

天童は、職人、素材を基軸とした経費削減構造を支えに、それが許容し、織田氏のお国替えに従って伝播した将棋文化を深化し、大阪より駒師を招いて内職の高度化を図った米沢に対抗した。隣接する高畠から移封された天童で、織田氏は、楷書の米沢に対峙し、草書の天童を差別化した。天童は、漆書による都鄙の風土文化の統合、大阪の能書家、水無瀬兼成が正親町天皇の勅を拝して、揮毫した草書、漆書を原型に銘柄性を向上した。1911年の第8回内国物産共進会で中嶋為三郎が三等銅賞を獲た。この職人技能の向上で、天童は銘柄を確立し、高尚な市場を駒師によって支え

た。その一方、道具の機械化で経費を削減し、商品の標準化、価格の平準化で、温泉場の交流の風土を源に量産・量販の基礎市場を拓いた。重層した社会・市場の増幅機構は、将棋指しを活用した銘柄の向上、将棋祭りや将棋文化のアイコンを深化し、全国市場を掌握させる一方、産地のガリバー型寡占構造を強化させた。中国の敦化に展開した天童将棋(将)は一般市場を醸成し、高尚市場との饋還関係を生み、高尚市場を支えられ、土産物市場の銘柄を育て、駒師の存立をも可能とした。

都鄙の工芸と文化の表徴に顕われた産業構造の時間的、空間的革新は、地場の変動、時空の変遷を惹起した。京都、奈良、大阪の古都に囲まれた生駒の茶筌産地でこの地場の変動と時空の変遷が風土文化の深化と産業地域の革新を論及する上で、一つの視座を呈示している。

3 地場の資源と技術の伝播

将棋も、茶筌も地場の原料と伝承の技術を、主産地形成の基軸とし、資財の革新、代替資財の活用、先端技術の革新と補完技術の導入で、伝統工芸の存続を可能としてきた。無論、革新の原動力は、源泉をなす風格の経済の活性にあるが、基礎需要を確保するには、経費の削減を可能とする規模の経済が、道具の改良、機械の開発、資材の代替、需要の開拓を通して求められる。生産性の向上には、技術の開発が不可欠であり、芸術性の高揚には、付加価値、銘柄性を増大させる技巧の向上が求められた。両者の市場における均衡が、生産・消費の両面の趣味社会を培養し、その社会が市場を醸成してきた。

風格の経済は、江戸時代に大橋、伊藤が世襲した将棋所が、涵養し、幕藩体制下で、各藩に伝播し、御前試合での将棋師の駒や盤に表徴された。素材の木材や漆に拘り、木工や漆芸に資財と技術の統合がなされた。技能や技法で磨かれた、字体や色合い等限られた範囲で、駒師は研ぎ澄まされた意匠を活かす技巧に凝り、名人が使いこなして駒を磨き、魂を入れた。このことで、作り手と使い手の息の合った評価が下され、価値を決めた。それが、付加価値を増加させるアイコンとなり、趣味の社会を増幅させつつ、高度化し、風格の経済を饋還的に向上してきた。趣味の社会を培養するためには、無論、規模の経済による経費削減は、不可避である。しかし、大量生産にあった機材が開発され、印字も合理化され、究極的には電子化されると、対局の場所の緊迫感が醸し出す雰囲気や会所の和やかな雰囲気、縁台将棋の日常性も薄れ、対局の場所を味会うこともなくなり、文化を衰微させた。

対局の総合的美観の名人戦等での覚醒は、規模の経済で裾野が広げられた趣味の社会で、趣味と趣向に応じた範囲

の経済を育み、多様な地場の資源を活用する余地を造る。血縁、地縁で培われた同業者による産業地域社会は、連結の経済や速度の経済を活かした、資財の融通や仲間卸による需給両面での平準化で、危機回避の風習、慣習、慣行、規範を育んだ。その硬直化は緩衝機能を低下させ、自動安定化機構を崩壊させた。需給両面での構造的変化が、天童将棋株式会社による中国の吉林省淳化を拠点とした国際工程分業、国際製品分業を促し、規模の経済を活かし、自然と文化の触れ合いによる将棋文化の継承を可能とした。これが、範囲、速度、風格の経済を活かした駒師と呼ばれる職人の手造り将棋を残存させ、技術と芸術が一体となった工藝としての将棋文化のアイコンを保持した。天童は、明治維新による地場の変動に対しても、城下町の温泉場を活かし、将棋祭りを興し、絶えず将棋文化を培うことで、風土文化を深化した。将棋文化の涵養と将棋社会の培養は、地場の資源を最大限に活用し、練磨された技術を伝播し、産業地域社会を革新し、天童将棋を地域革新の源泉、アイコンとした。

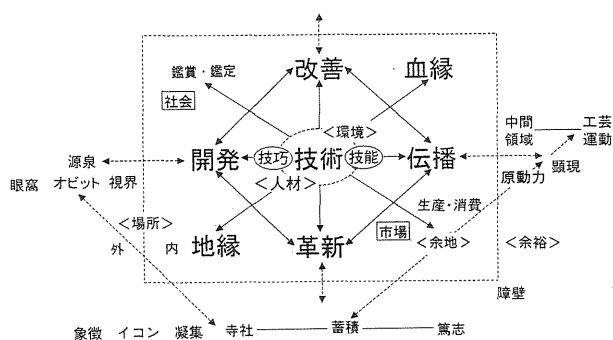


図3-1 技術伝播の構造

出所：著者作成

技術伝播は、職人・親方による学習、触発の直接的伝播だけでなく、製品・鑑賞を通した顧客と作り手間の間接的伝播が技術革新に持つ意義は大きい。技術、技法だけでなく技能・技巧を備えた人材が居住して、地場資源を活かした。そして、優れた接遇環境が、秀でた人材を導入し、それが革新資源としての人材だけでなく、革新環境を励起し、技術・技法を模倣から、改善、革新、開発で独自のものとしてきた。

正倉院御物は、個々の工芸にとって、技術革新の源泉をなすアイコンであっただけでなく、工芸相互の醸し出す触発効果を生む源泉をなすアイコンでもあった。また、それは、工芸品に取り込まれた技術交流の軌跡 (orbit) を表徴するだけでなく、その背後に潜んだ技術開発の眼窩、視界 (orbit) をも顕現し、物理的・精神的に二重の技術開発・伝播の直接的・間接的オービットをも顕現させていた。職人にとって、奈良正倉院御物に象徴される名品の存在と閲覧は、都の天皇、公卿だけでなく、鄙の寺社や武家による発注と競技による名誉以上に大きな触発効果を持ち、技術伝播の要をなした。献上は、職人に栄誉を与える反面、技術の門外不出、父子相伝、産地守秘による技術伝播の障壁をなし、産地革新の活力を削ぐ場合が少なくない。

技術伝播は、核心地内外の障壁によって阻害されるだけでなく、産地が蓄えた相対的伝播の潜在力を顕現する余地と余裕の規模、技術と人材の水準によっても左右される。また、伝播経路が伝播に関連した摩擦、軋轢を減殺し、伝播を円滑にする環境、構造、組織、機構が構築されているか否かも、山本鼎の農民美術運動と農民工藝に表徴された農民美術指導組合の中間組織の如く、伝播の誘導以上に意味を持つ場合が少なくない。工藝の技術革新において、修験の場所や伝導の殿堂をなす寺社は、技術導入、開発、改善、革新に深く係り、洋の東西を問わず、歴史的にも重要な役割を果たしてきた。風土・風水・水土・風習に培われた修験、伝導の体系は、経路に沿って地場の変動に共振し、時空を変遷させ、風土文化を深化し、地場産業地域を革新

都の有職故実だけでなく、鄙の風土文化が、将棋だけでなく、こけしや細工物等に見られる美観を培い、地場産地の革新を促して来た。城下町を核に育まれた地場の需要は、地場の資源と地場の技術を連結し、地場の産業を育んだ。地場の風習、風俗によって慣行、慣習化された地場需要は、郷土産品への域外需要等の地場関連需要を取り込みつつ、地場産地を拡充した。地縁、血縁の技術伝播と地場需要の均衡が地場産地の革新を許容し、自律的産地を育ててきた。婚礼や新築等、晴れの儀式と係った新潟の村上椎朱は、こうした地場産業の典型例である。家具と什器、装飾と装身を越えた需要規模は、多様な村上椎朱産地を培ったが、城主の趣向と装身の需要は仙台椎朱を中規模な鄙の町、村上堆珠産地と差別化し、小規模な地方の主都の産地に留めた。村上は、木彫と漆芸の技術を重合し、木地師が培養した下越から置賜に至り、羽前と越後を地場資源のフロンティアで結合した。ここには磐梯朝日国立公園設置に見られる両者の媒体、紐帯機能を活かし、木彫に加え、独自の髹漆の技術を育む風土があった。ペルシャ、中央アジア、蒙古、中国、朝鮮と育まれた漆芸は、正倉院御物をそのアイコンとし、仏像、仏具の発達と共に技術、技法、技能、技巧を革新してきた。宋・元時代と鎌倉時代の仏教・文化の交流が工芸水準の次元を転換し、彫金と彫漆の技術を高度化し、新たな木彫と漆芸の融合・合成による技術の革新を齎した。これは、地方の首府を開闢し、鎌倉を新都とした鎌倉時代を経て、京の都に執政の首府を戻した室町時代に、豊富な地場資源を活かして、漆の層に彫刻する中国の堆珠技術と一体化した(図3-1)。

してきた。仏教文化と係った彫刻、塑像、金工、木工、漆芸、鋳造は、その典型である。村上堆珠の源泉も、1394年の瀬波郡杜沢の耕雲寺建立、城主交替で導入された京都の宮大工の技術にあった。

導入技術の地域化は、武芸から統治に役目を変じた江戸時代に小城下町の武士の余技で促された。尾形光琳による琳派が興隆し、光琳と時を同じくして仏師宝山湛海も死んだ1716年を元年とした享保年間に木彫・漆芸は、清朝技術の伝播、刺激をうけ、江戸で深化した。これは、参勤交代で村上に伝播し、武士の余技の域を遙かに超えた彫師の山脇、塗師の中山等の名工を産んだ。この技術、技法が、庶民の屋台文化興隆による地場需要増大と同期化し、武家屋敷と寺町の間の大工町や職人町に浸透し、職人の技能、技巧と相乗し、地場技術を革新した。江戸と城下の参勤交代は、文化・文政の工芸文化興隆期に江戸の名工玉権象谷に学んだ藩士頓宮次郎兵衛と沢村吉郎による椎朱、椎黒の技術集大成を齎し、藩主内藤信思の殖産政策を触発し、漆栽培奨励等、地場資源を培った。

参勤交代の回路、街道は、京文化を鄙で地域化した秋田佐竹の分家、角館の樺細工の銘柄を鑑賞眼に優れ、鑑定眼を備えた弘前の津軽公に認めさせ、技術革新の原動力を培った。このように、街道は、技術伝播の経路だけでなく、献上を契機とした技術革新の場、革新環境励起の基軸をなした。これは、江戸と京都、新旧の都の文化・技術合成の基軸をもなし、地場産地が殖産政策と関連して確立した江戸時代に地場資源と技術伝播を繋ぎ、産地革新を齎した。京を母胎とした宮大工の技術と江戸を母体とする髹漆の技法の合成は、文化文政の気風がおきた文化2年に宮大工稲垣の次男に生まれ、内外の博覧会を通して銘柄を確立した有機周斎によって成され、村上堆珠は明治維新の変革期を乗り越えた。

地場での素材、技術、人材、機材の市場における循環は、技術革新による生産性・効率性向上、芸術性・銘柄性確立による付加価値増大で市場を拡大した。これは、技術、人材を組織し、流通を担う機能、組織を分化した。これは、製品だけでなく素材をも産地内外の卸問屋に依拠させることで広域化、全国化、国際化し、地場循環を次第に崩壊させてきた。人材や技術の交流に触発されて導入、革新、改善、開発された技術、技能、技巧、技法の地域化が、地場産地革新機構に不可欠な革新資源を培った。地場産地は、市場拡大と消費増大に対応した資財供給が前提で革新する。漆芸産地での木材から化成品、木漆から塗料といった技術による資財代替や木工産地や陶磁器産地での素材、素材の調達圏域拡大は、国内から海外に及び、産地存立基盤を脆弱した。この結果、産地は地場の資財ではなく、地場の人材、特に人材への技術依存度を高めてきた。

全国的民芸産地をなした砥部焼産地は、土器、須恵器、陶器の歴史的重合性はあっても、1777年の大洲藩の殖産政策による磁器転換と輸出産地化の時すら地場の内発的技術革新の潜在力は乏しかった。この転換は、取引先の大阪淡路町の砥石問屋和泉屋治兵衛の進言を機とし、天草砥石を原料とした肥前の磁器や肥前長与窯の陶工を雇って高浜窯を開いた天草の庄屋上田に習った、技術が齊した。導入当初は外山の砥石屑を用い、産地の確立とともに本格的に天草砥石を移入した。これとともに、肥前の黒牟田、大村藩の波佐見、平戸藩の三河内の技術を藩命で導入した。藩命で起業した御用油商の門田金治は経費削減と堅牢品質、技術の向上を図り、地場資源の不備を、釉薬や土練も含めた総合的導入技術の改良で補充し、移出、輸出市場での競争力を培った。1815年には外山に近い五本松花畑に開窯し、18年に川登石を発見し、肥前の陶石粉碎の水車利用技術を改良し、磁質を向上し、砥部白磁を開発した。この風土文化の深化が、時代とともに全国から導入した技術を活かし、内需転換とともに、工藝運動、民芸運動を受容し、砥部の銘柄を育み、産業地域を革新した。

地場の資源に依存して普遍的に展開した石工業も、技術、技能の向上と広域市場の構造で、広域産地から全国産地に昇華した。さらに、それは、資源の国際化と経費の削減との関連で、国際化し、国際工程分業、国際製品分業で、国際的工藝産地の中枢性を高め、他産地の成長を抑制し、主産地を育んだ。この典型は、全国的石工産地として革新してきた岡崎で、墓石や石彫等、商品に応じて韓国、中国福州、姉妹都市のスエーデンウツェバラ、イタリアと素材調達地を地球規模で広げ、福州墓石、イタリア大理石等に見られる加工産地の発達、棲み分けを促した。1922年に核心地周辺の明大寺に設立した岡崎石工藝術研究所や明治27年設立で二宮金次郎の薪負読書石造で、全国の小学校、報徳会を通してその銘柄を確立した鈴木忠石工が1936年に設立した鈴木美術研究所が風土文化を培った。この石造美術と東海自動車工業地域で育まれた加工機械、器具、技術を活用し、国道沿いで地下水の豊富な上佐々木の石製品工業団地(1964)、原石産地に近い稲熊の石製品公園団地(1973)が造成された。2つの中小企業団地は、石製品業の合理化、効率化による生産性、中枢性を向上させつつ、規模の経済と範囲の経済を両輪に量販産体制を構築した。市街地の拡大と石屋町の混住による産業地域社会の脆弱化は、花崗や梅園から上佐々木、稲熊から域外、海外へと向かった石材の調達、加工、購入、修正の眼窩を広げ、南ア、印度、ブラジルと地球規模での石製品業の体系化を齎し、地域的共棲体系を育んだ。地域的共棲の体系は、産業の競争共存だけでなく、日本碍子やトヨタ自動車が育んだ水に関する未踏・先端技術と高度情報に加え矢作川流域の構造に留意

した水域の計画や矢作川沿岸水質保全対策協議会の住民運動によって培われた倫理と摂理を重んじる風土文化の深化によって支えられている。岡崎では、国道一号線公害反対の住民運動が地域環境により配慮した生態的地域計画論を培い、石工団地や三菱自動車、豊田工機等、近代工業配置を厚生、環境の視座で制御し、地域産業の革新を齎し、連携による構造的危機を克服させ、高度化させた。

地場資源の温存は、資源賦存地域の変化によって、鉱業権で保護されていても困難になる場合は少なくない。地下資源は地上の土地利用との関連による地代だけでなく、環境によっても制約されるようになり、地域計画、都市計画と地域構造、都市構造との整合性が、工業化、都市化の進展にともなって要求されるようになってきた。大規模陶磁器産地の瀬戸は、この陶磁器関連業の地域化と名古屋大都市圏の都市化に伴って地域公害や生態擾乱が深刻な課題となってきた。こうした状況下で、革新環境を陶磁器関連業が堅持しえたのは、1885年に設立された製品の検査、共販、陶土の採掘、分配を行う磁工組から陶土の採掘、精製、練土、分配の機能を1899年に受け継いだ瀬戸陶磁器商工組合の努力による。これは、1925年の瀬戸陶磁工業組合、1944年の瀬戸陶磁器工業施設組合、1947年の瀬戸陶磁器事業協同組合と名称を変えながらも、総務、生産からなる総務部に対して、陶土の統計、調査、調整、配給を行う陶土課とともに、運搬業務、採掘計画、跡地整理を行う採鉱課を資財担当課に加えて擁した。この組合が、陶磁器の風土文化を育み、深化した風土文化を媒体に土地利用を都市計画で規制した。これは、木節粘土、蛙目粘土、桂砂、シルトの賦存に合せた計画的採掘と跡地整理を統禦した。資源の円滑な採掘を可能とする緩衝機能を果たし、これは愛知県や瀬戸市、業者と住民の媒体として、自動安定化機構を培って、大規模陶磁器産地を支え、豊富な地場の資源を活性化してきた。

地場の素材が豊富な木工加工も、風格の経済による銘柄の確立があっても、付加価値と経費削減の均衡から輸入素材を活用するものも少なくない。地場から広域、全国、海外と原材料市場の拡大が見られ、仏壇、仏具、家具、什器だけでなく、玩具、遊具に至るまで国際工程、製品分業が一般化してきた。薪炭材と競合しないミズキ等に依存したこけし等では、組合を活用した営林署からの国有林払い下げで、地場の鳴子から隣県の大船渡等に調達域を拡大する一方、1974年から82年までの町有地と部分分取林制度を活用した如く、地場素材の育成がなされた。素材では、派材や間伐の利用に象徴される物質的価値観に加え、素材に潜む靈魂の存続と言った精神的価値観が革新思想として、産地の革新に深く係った。日本では、神社がそのアイコン、革新思想、文化涵養の中樞をなし、その祭神を通し、全国的

な木地師文化の革新、共棲体系も育まれた。祭神、御神体の中には、三河綿織物産地、西尾の天竺神社の如く、外来技術伝播を表徴するものもある。

革新思想、文化の涵養は、三州瓦における廃瓦の粉碎、再生によるシャモット活用等、環境保全、公害防止の構造的強制下で廃材の活用を促進する主体的思想を培った。この主体的思想は、1972年の四日市公害裁判の住民勝訴、岡崎国道1号線公害訴訟以来の多様な都市化による住民意識の変革、矢作川流域開発研究会、矢作川沿岸水質保全対策協議会等で育んだ住民運動で高揚された。明治維新を契機に信州の臥雲辰致によって洋紡績に対峙し、開発された和紡績は、矢作川流域に展開し、取引中心の岡崎と背後の豊田市松平を中核に残存し、再生を重んじ、素材の価値を活かしきる風土文化を深化した。再生糸業は、木綿等の天然繊維のガラ紡に始まり、合成繊維の特殊紡績に至り、より付加価値の高い羊毛の落ち綿等を用いた紡毛を開発し、製品も帆前掛けから作業用手袋、内装材と自動車産業との係わり合いを持ち、松平に残存した。この「もったいない」の風土文化は、トヨタ自動車が生産の地域化と自ら推進する5R(reduce, refine, recycle, reuse, retrieve)運動で、東海自動車工業地域の革新環境と革新精神を涵養し、東海の人物を活かせる気風、風土を育んだ。この風土が、受発注関係を通じた技術伝播の円滑化の状況(milieu)を産み、地域産業構造、産業地域構造の重合、地域産業社会、産業地域社会の合体を産んだ。資財の物質的価値に、精神的価値を注いでその価値を全うさせる「もったいない」の文化は、「ものづくり」の人機一体となった魂を込めた技術を育む革新的風土を培った。これを媒体に、構造的な環境産業化機構の構築は、製瓦業を始め、三河地方に展開した、既存産業の革新と同期化し、厚生・環境を理念とした現代産業革命に沿ってそれらを刷新した(図3-2)。

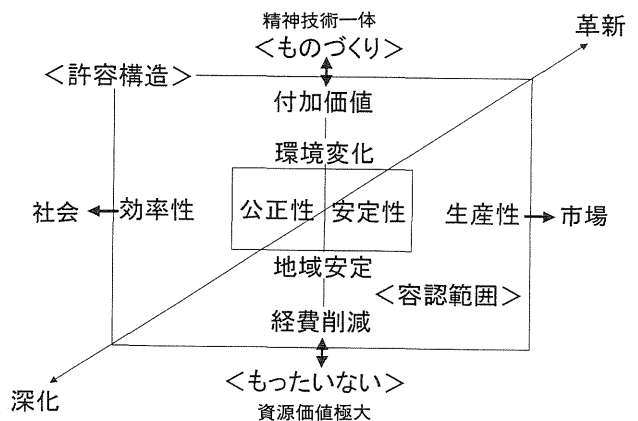


図3-2 許容の構造と容認の範囲

出所：著者作成

即ち、瓦屑は、三州瓦の主産地が臨海に位置する優位性を生かし、埋立地等組合の共同処分場に投棄処分してきた。

量産・量販に伴う瓦屑の増大と矢作川水質対策保全協議会等による廃棄物問題、水質汚濁への住民意識の高揚は、処分場を枯渇させてきた。東海窯業地域全体での粘土の枯渇化や人工粘土開発と言った産業構造的欲求と地域主体的意識の同期化は、愛知県陶器瓦組合の構造改善事業の一つとして、愛知県の補助金を利用して産業廃棄物の共同処理、再生利用のシャモット工場を、1985年に大規模製瓦業の移転した衣浦臨海工業団地に建設せしめた。これは、89年に新粗砕機で路盤材、盛土材の販売をはじめ、93年に年間生産量の3%を処理しうる新シャモット工場を建設し、組合の産地支配力、組員相互の信頼度向上を進め、産地を革新した。さらに、碧南火力発電所で排出される年間70万トンの石炭灰処理問題と同期化し、三州瓦工業共同組合、三州碧南瓦工業組合、三州製土共同組合と中部電力はフライアッシュ利用研究会を設立し、リサイクルの地域システムを構築した。

主体的気風に促された企業資源の地域化は、構造的風土に涵養された地域資源の起業化を促した。両者の饋還関係は住民運動や中間組織が醸成する気風、状況による円滑化の媒体、触媒機能で、饋還関係に伴う軋轢を緩和した。直接的には、産業界の人材の移動、技術、機具の享有による生産性、効率性向上が産む経費削減、付加価値に加え、安定性、公正性による地域安定、環境浄化等の価値の享有が産業地域を革新した。経費的許容と価値的容認の重合する範囲での技術と価値の地域的享有は、主体的、構造的革新環境、中でも文化と風土の相互享有、醸成関係を規定し、地場の資源と技術の伝播の関連を規制している。

東海地域、その核心をなす三州、三河地域における製瓦業や陶磁業、織物業や再生糸、石工業や和紙業等地場産業を基層に、近代化された鋳物業、機械業、現代化を主導した航空機業、情報化への布石をなした自動車業の重層化、相関化は、複雑且つ独自の産業地域構造、地域産業構造を育んだ。それだけでなく、三河地域は革新的場所と革新的思想の享有を基軸に、革新資源の増幅、革新環境の覚醒を齎し、経費削減、付加価値の産んだ許容・容認の範囲で、社会安定、環境浄化、接遇改善、内外均衡を可能とし、革新機構を持続的に作動させた。この地域的革新機構が、革新環境を絶えず励起し、地場の資源を活し、技術伝播を円滑にし、共棲の体系を更新し、革新の時空を刷新した。

4 革新の時空と共棲の体系

三州、三河は、徳川家康が都の京都への砦として築いた大都市名古屋と産業創造の都、徳川家康の居城で、遠州の城下町、浜松の中間に位置する。西三河は、徳川家康の生誕地の岡崎を中心に、小零細の旗本領からなり、背後の徳

川家誕生地の松平（豊田市）が位置し、今日でも残存し、革新する再生糸業の中樞をなす。その前面は、日本のデンマークと呼ばれ、デンパークをそのアイコンとした安城や日本の点茶の中心で、天竺神社に象徴される三河綿業の中樞をなした小京都、西尾等を擁した。三河湾に面した製塩業の吉良や養鰻業の一色等も南三河と矢作川流域の西三河の接合面をなし、徐々に自動車工業地域に変容した。豊田は、矢作川水運の上流の土場をなした久澄橋、九久平の市の機能と盆地の中心的小城下町、挙母の都の機能が重合し、製糸業から自動車業に中核産業を替えた。豊田の背後には、西三河の西南端、碧南生まれの総合芸術運動家藤井達吉が指導し、トヨタ自動車の役員による芸術支援の双丘会が支えた弟子の山内一生等が主導した小原の三河美術和紙産地を擁した上三河がある。この接合面は、本来行政的には東三河に含まれ、足助を経由した塩の道と飯田街道の接点をなし、明治維新の陰で、交わりの宿をなした稲武を平成の市町村合併で豊田市に組み込み、革新的思想・文化を伝承し、革新的環境を覚醒する上三河との接合面を拡充した。平成の市町村大合併と同期化させた2005年の日本国際博覧会、愛、地球博は、人間の倫理と自然の摂理を覚醒し、生命と生態、厚生と環境に留意した現代産業革命の指針をなす自然の叡智を課題にトヨタ自動車の名誉会長、豊田章一郎を会長に開催され、地球規模で革新の時空を励起した。

時空 (locus) は、時間と空間が重合し、変遷する重合概念である。時間的には事前の過去と事後の未来を接合する現在を両面に留意して捉え、時流を主体的に洞察し、動態を構造的に掌握する。時空は、主体間、客体間相互の構造的関係、接合面に留意して空間を4次元的に掌握した概念でもあり、主体の実践と客体の革新の帰結でもある (Y. Miyakawa 1981)。4次元的空间には、空間を変容させる営力が構造的に作動する「場」と作動する営力を主体的に統御する領域としての「所」が重合する。この空間には、場所の広がりを表徴し、構造化された空間としての眼窩 (orbit) とその動態としての実態的眼窩だけでなく、主体の視野を規定し、視界を画した抽象的眼窩に加え、実態的、抽象的眼窩の根幹をなし、発散・収斂の根源をなす権威、象徴 (iconography) が存在した。時空は、時流に相応して絶えず変遷し、地場に共振し、主体的、構造的産業構成要素の共棲機構を涵養し、産業地域を革新し、風土文化を深化してきた (図4-1)。

地場の変動と時空の変遷は、産業地域の革新に環境、資源の構造的側面だけでなく、思想、場所と言った主体的側面も含め、革新機構そのものの構成要素や構造的原動力、主体的操縦力と係り、その背後にある風土文化の深化とも係る。風土文化の深化は、視界を規定する権威を醸成し、革新思想を涵養し、革新環境を触発し、励起し、次元を転

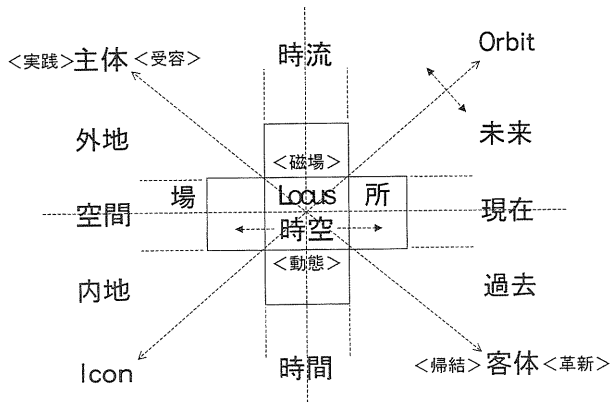


図4-1 革新の時空と地場の変動

出所：著者作成

換し、時には場所の変換を齎し、拡充した眼窩において革新的場所を生起させる。茶道文化は、戦国時代から興隆し、武家文化の浸透に連れ、名古屋の大都市圏を基盤とした織田信長、豊臣秀吉が堺の千利休を活用し、確立した公家文化の都、京都をも取り込み、政治経済を深化した。茶道文化は徳川家康の幕府を置いた江戸を頂点に、小堀遠州を開祖とした流派を育み、分派を作りつつ、古田織部等も活かして、茶道関連産業の共棲と体系を培ってきた。茶道関連産業は多様な眼窩と多岐の象徴を持つ。素材の普遍性と産地の多様性を伴った茶陶、茶器と異なり、茶筌は、竹材の普遍性と竹細工産地の多様性にも拘らず、奈良、京都、大阪、大津の古都に囲まれた生駒に産地を特化し、茶道文化の生産面で特異なアイコンをなした。

竹の持つ生命力は、竹製楽器で如何なく発揮されるだけでなく、日本国際博覧会、愛、地球博の課題、「自然の叡智」を表徴する日本館の素材、修景で利用され、古くから茶室の内外を一体化する素材として活用された。竹細工では、竹林の全国的自生、防災や修景等による栽培の空間構造と職人、親方、下職、住民の社会文化構造の織成す風土文化の深化が、産業地域社会を革新してきた。歴史的には、災害の地域構造と防災の地域計画が重合して造成された竹林の地域構造と地域の殖産政策が、地場の需要と深く関連して、竹細工の産業地域革新を促してきた。しかし、代替製品市場拡大過程での、竹製品における付加価値の少なさと経費削減の低さ、農閑余業、農家副業の減少、加工労働の厳しさの相対的増大、楽しさの相対的減少が、竹製品産地の縮小均衡を齎した。

竹製品の中で、付加価値が大きく、加工の充足感が高く、風土文化の深化と係った部門が、茶筌、茶道具である。茶筌は、日本後記に記された如く、弘仁6年(815年)に僧永忠が嵯峨天皇に茶を献じた、遣唐使が導入した文化を表徴している。六波羅密寺を建立した踊念仏の空也上人の弟子定盛に起源を求めた煎茶茶筌は、出雲のぼて茶の茶筌に類似した。空也堂茶筌は茶を混ぜ煎じる機能に特化した。今日

の茶道の茶筌は、庶民の日常生活に基礎を置いた空也堂茶筌とはその社会・文化的基盤を異にし、1168年に栄西が唐より導入した抹茶法を基礎にし、非日常的時空を味わう、室町時代から興隆した茶道の形成に伴って革新してきた。茶筌は奈良県橿原の中曾司地区に伝承されている編糸で下段を縛り、先端は抹茶に合せて繊細な割竹の様式を持った中曾司茶筌を源とした。仏門から武家、公家、町人へと一般化した喫茶の風習は、茶の品当で、闘茶の遊戯を生み、茶筌の基礎需要を育んだ。これが、奈良の町寺称名寺を出て、京都に上った闘茶の判者で、連歌師として諸国を行脚していた村田珠光(1423-1520)による茶道の社会文化を培っていった。

都は革新的場所をなし、革新的思想文化を育み、都の風土文化に触発された革新環境において、四畳半の茶室を考案させた。茶道具も外見は粗相ながら内面は清純な綜合美観を重んじた。仏教、武家、公家、町人文化を超えた、和合同心の茶道を確立したのは、足利義政とともに書院台子の茶儀を工夫した能阿弥である。能阿弥より点茶の方式と座敷飾り、茶道具の目利きを村野は習得し、一休宗純に禅の精神を学び、革新人材の連繋に触発されて茶道を拓いた。生駒の高山茶筌は、村田珠光の発案で鷹山城主、鷹山大膳介頼榮の次男時重で、出家して高野山に居た連歌師で、奈良の水門町に居住していた入道宗砌(-1455)が考案したとされたが、高山八幡宮の宮司、山崎清吉の『高山茶筌誌』(風土社、1976)で分析されているように確証はない。鷹山は、京都、奈良、大阪の国境にあり、町人の茶道が興隆した堺にも便利な土地柄であるだけでなく、天皇家の守護や宮廷の竹細工を支え、畿内に移り住んだ紀ノ川上流の阿田に発する阿多隼人の故郷である。ここは竹屋垣外近くの吉野離宮、金剛山、葛城山、二上山から竹林の美しい竹内街道を経て大隅隼人の故郷、京都田辺町山城の大住に至る竹林文化帯に位置し、細く堅い淡竹を繁茂させていた。この時空と風土文化に涵養され、鷹山の茶筌の銘柄を確立し、風格の経済を育む源となったのが、村田珠光を通し、京都の珠光庵で、後土御門天皇に宗砌作の茶筌を献呈し、「高穂」の御名を賜ったとの伝承と、秘伝としての領主、家臣への技術・技法の伝授と技能・技巧の練磨である。

風土文化の深化が、茶筌細工の地域化と淡竹資源の起業化の饋還関係を職人の増幅の方向ではなく、技術・技法の高度化に向かわせ、茶筌産地を革新した。秘伝、秘法、家伝、門外不出といった伝統保持の名分は供給を制限し、市場の売買、社会の交換等の取引過程で価値を増殖する機構の一部をなした。利潤の分配、剰余の配分が技術・技法の革新、意匠・装飾の開発に割かれることで、産業の革新、文化の深化が齎された。社会における献上は、工芸の技術・藝術の向上を強い、技術革新、意匠開発を促がし、商品開

発のアイコンをなし、産業の革新と文化の深化を進めた。市場、社会における評価、銘柄は、需給両面での主体的機構だけでなく、鑑賞、鑑定を通じた構造的機構を作動させた。風格の経済が作動する容認の範囲と許容の構造との重合は、箱書きによる銘柄保証の余地を産み、都の革新の時空と産地の共棲の体系を構築する原動力を培った（図4-2）。

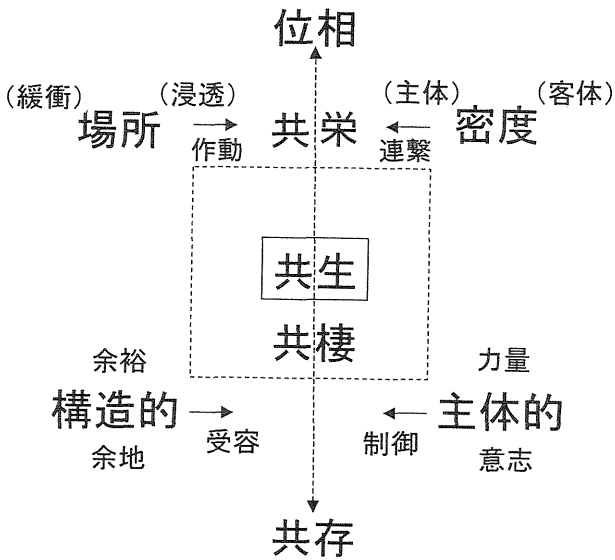


図4-2 産業資源の地域化と地域資源の起業化
出所：著者作成

風格の経済は、価値の附加を齎し、技術・技法の開発、技能・技巧の練磨による洗練された美観を追及させた。茶道は、仕来りの中で、装飾に頼らず、機能を向上させた。茶道の時空における点前、喫茶、茶器、茶室は総合美観を産み、亭主、貴人、客人の双方に充足感を与えた。茶道は、村田珠光、武野紹鷗、千利休を経て、確立するとともに、水屋に近接する和菓子の発生等、速度の経済に係った裾野を広げつつ、風格の経済を培った。地域革新の源泉をなす、禅の精神を取り入れた簡素静寂を本体とした侘茶の茶道文化(icon)が、礼法の差異を生み、共棲の機構を育んだ。人竹一体を表徴する茶筌は、茶道文化の実践的象徴、アイコンとなり、織田信長に鷹山氏が滅ぼされて以降も、士族授産の茶筌師として残存した。生業として茶筌産業は、深化し、革新の時空を逆に励起し、天正16年(1588)には、統領高山頼盛が豊臣秀吉の北野大茶会に茶筌100本を献上した。堺の町衆、武野紹鷗の茶頭千利休も茶杓等の茶器や茶室を飾る花器等に合せた茶筌の多様化の源を培った。

表層的には、茶道文化を巡る豊臣秀吉との軋轢で千利休が自刃した後も武家文化に浸透した茶道は滅びることはなかった。徳川幕府の開關後も、奈良奉行の命で、上洛した徳川家光に献上し、高山は茶筌産地を保持し、社会文化の風俗として流布された茶道関連産業の一面を占めていった。茶道は、千利休の孫宗旦の第3子で不審庵に住む宗左

を源流とし、紀伊侯に仕えた表千家、今日庵に住む第4子宗室を源流に加賀侯が支えた裏千家、第2子で京都に住む宗守を源流とした武者小路千家の三派に分かれた。さらに、三斎、織部、遠州、藪内、石州、宗偏、庸軒流の部門を創りつつ、珠光型、利休形等の茶杓に表徴させる流派を象徴する茶器を産んだ。二つ割で造った竹の茶合と桜を素材とした椀形に表徴される煎茶を超えた抹茶の産業文化を深め、消耗品の茶筌におけるの規模の経済だけでなく、流派毎の好茶筌による範囲の経済を培った。繊細な茶筌と茶筌売の行商は、茶会を通じた茶道文化の深化と茶室景観による風土の涵養が、茶道文化だけでなく、情報交流の深化の場所としての茶会による速度の経済の意義を高めた。統領の高山頼茂以下一族が、徳川時代に京極丹後の守に仕官して、宮津に移住する際も、所領、知行、俸禄もない無足人となりながらも、苗字帯刀の誇りを持ち、和州高山村無足人座を形成し、茶筌師として踏み止まり、高山茶筌産地を保持した。これは、古都の縁辺で、古都群の中間に位置し、隼人の竹林文化の辺境、前線、フロンティアをなした高山が、茶筌工芸の中核をなし、革新の時空を培い、茶道工芸の共棲体系の中核をなすに至ったことを表徴している。

時空の革新によって、時間的には次元の転換が、空間的には場所の変換が生じ、時空それ自身が異次元、違場所に移行し、新たな革新の源泉が培われる場合が少なくない。中心においては、自生的革新が、縁辺においては、交易や征服による他律的革新が生じ易い。中心産地は高度化の帰結として、中枢機能を向上させる。中枢は全体的管理機構と密接に関連し、共棲の体系を培う一方、風格の経済を育み、文化の源泉をなし、藝術と技術、技巧と技法の表徴としての意匠開発で、価値を附加する。中枢管理、文化厚生は、都の機能の両輪で、都は交流による社会の交換、献上で美観、価値を高揚し、交易による市場の取引、評価で利益、利潤を豊かにし、多様、多岐の社会を反映し、都市圏を越えた市場圏を培い、規模、範囲、速度、風格の経済を育む。都の基層的経済は、多様、多岐の生産、取引、流通、消費、処理の過程で、産業の共生、共棲を生み、産業の共存、共栄、触発、競争、革新に伴い、産業間の連結、連繫、連帯、連合による経済をも産む。

中央、中心、中枢、中核は、枢要な場所、作動、機能、構造とその重点に差異はあるが、それぞれ、革新機構を作動させる要を擁する。中央では、連結の経済を円滑に作動させる媒体、紐帯の存在が主体的にも、構造的にも肝要となる。中央における異質な要素、作動構造、機能の連結は、軋轢を緩和する媒体の存在を不可避とし、触発、同期、相乗による革新を生み、絶えず新たな文化、社会を創り、経済、政治を刷新してきた。数学的中心でなく、物理的に物事が収斂し、発散する場所としての中心では、連結、連鎖、

連帯、連合といった均衡、安定した状況よりは、連動のような動態における営力間の軋轢、触発、吸引、反撥といった作動が、革新的時空を構成する。中枢は、組織、管理の主体的統禦、統制による革新の制御に深く係り、主体的革新時空を醸成する。中核は、作動する営力を醸成し、収斂、発散の状況を生み、構造的に次元転換、場所変換を齎す革新機構を作動させる時空をなす。

革新の時空は、中央に対峙した辺境、中心に対置した縁辺、中枢に対応した末梢、中核に対抗した前線においても、主体的にも構造的にも醸成される。これは既存の組織、体制の内外の構造的軋轢と深く関連する場合が多い。内外の政治経済構造、社会文化構造の変動、変革、変質、変遷が、辺境に革新を惹起する余地と余裕を齎す。中でも、征服に伴う滞留、交易に関する中枢の構築、交流による融合、触発の増大、相対的安定による余地・余裕の拡充が、革新の時空を醸成した。藝術と技術の伝播は、容認する余裕と許容する余地を持った時空で、意匠と品質を革新する。辺境や縁辺は、中央や中心と次元、場所を異にした収斂の時空を醸成し、地域化の過程で集積の機構を培い、革新人材による主体的革新から革新資財に依拠した構造的革新を惹起する。中枢に対する末梢は、管理、統禦の減衰から自立、自律の強化を可能にする余裕と余地を産み、独自、独立の文化、技術を育む風土を培う。核心から離れた前線は、空間的フロンティアをなすだけでなく、産業的フロンティアをなし、パイオニアスピリット、革新精神、革新気風を醸成し、革新状況、革新風土を励起し、機能、構造の両面で、革新機構を作動させる主体的好機、構造的契機を多発し、革新の時空を育む。

中心と縁辺、中央と辺境、中枢と末梢、中核と前線の中間は、それ自体、中間性を保持した時空をなしてきた。このフロンティアが、革新の時空を醸成し、革新機構を作動させ、次元を転換し、場所を変換し、吸引、吸着、収斂、集積の機構を育み、フロンティアとコアの間に新たな中間地効果を齎す場所を培ってきた。中間は、核心からの構造的拡散域と辺境に向けての政策的分散域の重合する場所をなしてきた場合に、革新の時空に転じる。中間では、辺境以上に拡散に伴う構造変革の契機と分散を惹起する政策実践の好機を掌握することで、革新の時空が醸成される。京都と奈良の中間に位置した生駒の高山は、この典型的事例である。隼人の竹林文化は、茶筌発祥の風土文化を育み、茶道の浸透と藩主の殖産が、風土文化を励起し、地域化を促し、自ら起業を許容し、革新を促す饋還機構の作動を齎した。

京都と江戸の間にあり、畿内の門戸をなした伊賀に生じた組紐は、このもう一つの事例である。伊賀は、中枢の都、京都での中核地としての生産性の向上を企図した組紐生産

の機械化と拡散域の縁辺に位置し、名古屋を経て新興の都江戸に向かう場所を占め、殖産政策で鄙の手組の組紐生産を存続させてきた。ここは、中核地での中枢機能強化、製造卸の効率性向上から都鄙の産地を共棲させつつ、伊賀産地の中核性を強めた。同様の関連は、京都の鹿の子絞りと尾張名古屋の有松、鳴海、大高の絞り産地の間にも見られた。ここでは、大都市名古屋に励起された革新の時空が、戦前からの京都、名古屋での韓国と中国を巻き込んだ国際工程分業と木綿と絹の製品高度化、日用と民芸、工芸と藝術の業態変化を伴って、産地を革新した。これが、都の京都を中枢とした共棲の体系を変革し、地域と一体となった鄙の名古屋有松、鳴海、大高を催事も活用し、国際工芸運動を惹起し、世界の絞り産地の中枢としてきた。

地場市場の規模と特性は、地場産業のなかでも、日常性、汎用性が強く、経費削減効果、付加価値効果の薄い、産業部門で、普遍性、共通性の高い資源を用いた製品、原材料を地場に収斂した。この産業は、地域化し、共棲の体系を築いた。竹細工や陶磁器はその代表的部門で、地場資源が限定的な漆芸品や石工品は、製品市場の変動で、産地が限定された。地場産業の高度化を惹起し、産地を特化し、新旧の都、京都・江戸を両輪とした産地の共棲体系を育んだものに、茶道文化がある。中でも、茶陶の発達は茶道の普及と表裏をなし、風土文化の深化による付加価値の増大と風格の経済の育成で産業地域を革新させ、大名のお庭焼に表徴される小規模産地の地域化をも可能とさせた。

茶道は、茶篩、茶筌、茶杓、茶柄杓、茶瓶、茶合、茶入（棗）、茶托、茶台、茶炉、茶釜等、直接喫茶に関係する道具、茶室や茶庭を飾り、美観を形成した。そして、茶道はまた茶事と茶室を結ぶ茶巾、茶袱紗、茶棚、茶簞笥、茶箒を含む器具、茶事を通じた茶技、茶気、茶味の練磨、製造・販売に係る茶師、茶師の技能、情報の収集、茶袋、茶箱等の道具の改善や茶菓に至るまでを体系的に革新し、共棲させた。

漆工品の木地をなす木工品は、木材に替わる樹脂の代替素材開発で、生産性、効率性を向上させ、経費削減効果を増大し、規模の経済と範囲の経済を作動させ、産地を革新した。山中漆器産地は、優れた木地挽き技術を活かし、木地挽きの里の風土文化を覚醒し、製品を差別化し、風格の経済を作動させて、中国を始めとした国際工程分業、国際製品分業による輸入加工品との競争力を蓄えた。これが原動力となり、産地革新機構における革新資源と革新環境の組み合わせを変え、根源的な革新力である木地部門を蘇生させた。この背景には、加賀百万石の城下町で、京都と江戸、新旧の都の文化を統合した鄙の都、金沢における多岐、多様な工芸の連結の経済がある。そして、これが可能とした加飾が金沢を金箔等の素材部門と異なり、京都の代替産

地とすることなく、鄙の都の小規模産地に留めた。それが江戸中期を起源とし、沈金装飾を特異にした海運の中心、能登の輪島を鄙の大規模産地として確立させ、技術、資材の地場資源の饋還関係を増幅させた。大規模産地、輪島に木地を供給してきた山中は、里の山代と異なり、山の湯が醸し出す木地師の里の風土文化を深化し、革新環境を励起し、プラスチック産地、輸入品産地として銘柄を失いつつあった、新旧の漆器団地を蘇生させた。

流派の宗匠は茶道の主体的共棲機構における指揮、操舵の要をなし、内外の感応、調整の補弼機構としての茶講や茶会を用い、茶道に組み込まれた新興、既存の産地の共棲を促した。漆器では、これに加え、地場市場の広域化、全国市場の形成、輸出・輸入の国際市場の成長に伴う産地の差別化が、革新の時空に応じた構造的共棲の体系を生み出した。

共棲は、社会や市場を享有し、場所を時間的、空間的に棲み分け共存する状態で、別種の生物や活動が一所に棲息し、互いに利益を得て共同生活を営む状態をも内包する。これは同時に二つ以上の人物、活動が棲息、存在する状態を意味する。共棲の原理は、人物と活動の場所における密度と場所の変動、軋轢の緩衝、媒体の機能に強く依拠する。同時に、構造的余地・余裕の存在、主体的統制・制御の意志・力量が軋轢・摩擦による消耗を共棲・共生による附加で補完し、統一的共存を可能にする。共生は、競争共存の一体的存在形態であるのに対し、共棲は、競争共存の時間的、空間的な生存域の棲み分けを意味する。関税も含め、政治経済的経費と深く係る共棲の許容構造と社会文化的価値に基く共棲の容認範囲の重合を共棲は不可避としている。絞り産業に見られた如く、技術・技能だけでなく、技法・技巧に依拠した、国際工芸運動は市場・社会を拡充し、風土文化の深化に応じた意匠の開発と製品の開拓で、構造的共棲の余地を産み、産業地域を革新した。中枢性の向上は、主体的共棲の原理に基く。絞りの有松、鳴海、大高に見られた存立基盤、地域、連繫、業態の差異を育み、旧市街地に展開した近代的国産絞りと旧城下町大高の京鹿子絞りの下請けに対比される構造的棲み分けを産んだ。そして、古くからの新村を支えた有松絞りと宿場に支えられた鳴海絞りの主体的棲み分けを、都市化に応じた自律的革新による位相的棲み分けに移行させた。位相的共棲は、同位的共棲に比べ、時空の変遷に応じる生態的順応原理が貫かれている。

5 むすび — 地域の革新と文化の深化 —

風土は文化を育み、文化は風土を培う。風俗は、風土と文化を結び、風習は風土と文化を統べる。風土と文化の饋

還関係は、文化の地域化を促し、風土の起業化を齎す。風土文化の深化は、接遇環境を向上し、技術を持った人材、意欲を持った資本等の革新資源を吸引、吸着するだけでなく、主体的な革新精神、気風、構造的革新状況、風土からなる革新環境を励起し、産業地域の革新を惹起する。産業地域の革新は、内外の構造変化、主体の価値転換で、惹起され、地場、広域、全国、国際、世界、地球と市場、社会の段階的次元の転換と場所の変換に応じてその形態を変える。産業地域は、市場における生産性と効率性に関する技術だけでなく、社会における鑑賞と鑑定、美観と意匠に関する藝術を両輪として革新してきた。技術と藝術は、技能だけでなく、技法と技巧の練磨によって統合され、革新資源として有効に革新機構に組み込まれ、革新の源泉、原動力を培う。

産業地域の革新と風土文化の深化の関連は、近代産業と伝統工芸では、組織、体制、構造、機能を異にする故に無論同一には論じ難い。一般的に近代産業は、汎用性と普遍性が求められる。それ故、市場における資本原理が作動し、経費削減を前提に生産が革新され、規模の経済が源泉となり集積地域を育む。ここでは合理性が貫徹し、風土文化の深化と産業地域の革新が関連することは少ない。しかし、企業資源の地域化や地域資源の起業化を通じ、産業地域革新と風土文化深化の饋還関係は増幅される。それだけでなく、この関係は価値の享有により、社会・文化を基層とした緩衝機能に優れた政治・経済的自動安定化機構を育み、産業地域の革新を円滑にする。トヨタ自動車を頂点とした東海自動車工業地域はこの典型である。これは、製瓦業の近代化と主産地形成の過程における鶴弥を頂点としたガリバー型寡占構造形成に見られる。産業地域の革新は、生産管理の合理化によるハード、ソフト両面での革新基盤の享有によって齎されるだけでなく、触発効果による生産文化の享有を根底に置いている。

「研究と創造に心を致し、常に時流に先んずべし」との豊田佐吉の遺訓に象徴される革新精神が喚起した革新気風の享有が、三河の風土文化を深化させる源泉をなした。これは、生産文化だけでなく、次第に生活文化にも浸透し、生産・生活の両面において共通の価値観を基底とした風土を培い、文化を育んだ。この風土文化は、自然の素材と天与の才能を重んじた碧南生れの藤井達吉の総合藝術運動、岡崎生れの山本鼎の農民美術運動にも顕現した。これらは、総合藝術村構築の痕跡、アイコンでもある小原美術工芸和紙産地や農民美術運動の根源、アイコンの上田の小木工産地にも表徴されている。

革新基盤は、革新時空における時間的、空間的距離を短縮し、地域、広域、国内、国際の段階で結合関係を強化した交錯構造 (cross-road) に加え、情報面、精神面での交

流構造(creole)を持つ。革新には総合的触発効果と作動機構における同期・相乗を可能とする基盤の余地と主体の余裕の存在が肝要となる。南三河臨海のこどもの国、ラグーナ蒲郡、トヨタの自動車博物館や豊田中央研究所が猿投グリーンロードを挟んで対峙した名古屋、豊田間の長久手の愛知青少年公園は、この余地・余裕を生み出してきた。2005年の日本国際博覧会、愛、地球博は、この愛知青少年公園と瀬戸の里山、海上の森を活かした。これに先駆けた東海環状自動車道と第2東名高速道路のジャンクションに近接したトヨタの森、愛・地球博の課題、「自然の叡智」を表徴する跡地の学園都市長久手の万博記念公園、豊田・小原間の上三河、藤岡の愛知県民の森は、東海自動車工業地域の核心地に精神的、心理的余裕と構造的、景観的余地を付与している。核心地、豊田の風土文化の源泉は、尾張名古屋の熱田の森に鎮守し、草薙の剣と日本武尊を祭った権力の砦、熱田神宮に対峙した猿投山に鎮守し、森に囲まれ、鉾と大碓神を祭った権威の砦、猿投神社にある。これは、時空において時流に先んじた技術の、文明の表徴、アイコンであった。こうした風土文化の中で、猿投の麓、花本に生れた大岩勇夫は、名古屋市長として中京デトロイト化計画の立案、実践の主体をなした。これに対して名古屋で豊田商店を開いた豊田佐吉の子、喜一郎は豊田の拳母で自動車工業を創業している。

この歴史的偶然に表徴された精神的基軸と航空機工業によって培われた構造的基盤が、企業資源の地域化と地域資源の起業化の饋還関係を増幅する革新的風土文化を醸成し、地域に深化し、産業地域を革新してきた。東海自動車工業地域は、産業地域革新の根源であり、都の文化・厚生5次産業の表徴でもある人材教育を重視した。このため、トヨタ自動車は、創業の翌年、1938年には豊田工科青年学校を設立した。これは技能者を養成し、本工の中核とした。養成工は生産現場で、創意工夫提案制度、看板制度を実践し、推進し、生活現場では給与者連合会の中心として、農会を意思決定機関とした農村社会を工業社会に変換した。この給与者連合会は、トヨタ自動車の拡大に、即応した周辺町村の合併運動、トヨタ自動車と川崎重工業の合併の東海飛行機跡地でのアジア初の元町乗用車専門組立工場操業に合せた1959年の市名変更運動の先兵をなした。

豊田工科青年学校は変遷し、1970年にトヨタ工業高等学園となり、通信制の科学技術学園工業高等学校と連携し、基幹技能者を応用技術者に導く道筋を造った。トヨタは、本格的国際化、世界化、地球化に対応し、高度の先端技術、未踏技術開発を必要とした。1981年には名古屋市天白区の豊田中央研究所跡地に英国のサセックス大学を範とした豊田工業大学が建学された。名古屋の豊田紡織工場跡地には、トヨタグループの産業技術博物館を建て、そこにトヨタコ

ンポン研究所を創設した。豊田佐吉の遺訓を覚醒した基礎、根源研究を励起するため、豊田工業大学も教養教育を海上の森に近い、瀬戸キャンパスに数理情報工学部を開設した。南山大学に委ねた。そして、自らは2005年に豊田工業大学シカゴキャンパスをシカゴ大学と提携して開設し、数理情報基礎科学の殿堂を築いた。これに加え、地球市場、社会に直接、深く係ったトヨタ自動車は、メガロポリスを基礎市場、基層社会とした東海旅客鉄道、中部圏を公益市場、公共社会とする中部電力と共に南三河の三河湾に面した蒲郡に中高一貫教育で、豊田工業大学同様に全寮制の海陽学園を開設した。さらに、内陸飛驒の世界遺産の白川郷には、稲本正を校長に、白川村、日本環境教育フォーラム等と非営利法人を組んでトヨタ白川郷自然学校を開設し、自然風土と工芸運動を一体化した。

この自然学校は、1996年開校の実物実践教材教育を重んじた富山国際職藝学院で独自の家具工芸も教える飛驒高山の清見村に1974年にオークビレッジを開設した武蔵野美術大学卒業の柿谷誠や74年に立教大学理学部助手から転じ、工人村を拓き、81年に生態系蘇生の環境教育非営利法人、ドングリの会を創設し、91年に森林匠塾を開いた稲本正らに触発され、自然の叡智を基幹に現代産業革命に不可欠な人間の倫理と自然の摂理を学ぶ場所とした。海陸の新たな教育運動拠点の間には、長良川中流の犬山で名古屋鉄道が開設した財団法人、明治村、三河・美濃の高原の境をなす明智で町が築いた大正村、美濃と飛驒の境の美濃に民間企業が開いた昭和村、明治村背後の可見に名古屋鉄道が開いたりトルワールド等の博物館、余暇保養施設が展開した。これらが近代と現代を繋ぐ風土文化涵養の基軸をなした。

東海は、関東、関西の中間をなす。背後の北陸は、江戸時代には米作を基本とした経済の時代に東海に劣らず栄え、織物、木地、漆器、陶器等の地場産業も盛んであった。北陸・東海の地場産業は、産業機械、工作機械の発生の母体をなした。戦国から江戸時代にかけて確立した東海の革新の時空は、赤津焼として、豊田に近接した瀬戸の赤津に残存する6古窯の1つを源流に培われた。これは、江戸時代に、有田、伊万里の技術を導入し、地場の陶磁資源を改良して、大規模日用品陶磁器産地を確立した。名古屋大都市圏にあって、名古屋港と瀬戸の大規模産地の間にあった瀬戸街道沿は絵付け、卸の中核地域と連携し、規模の経済、範囲の経済に加え、速度の経済を享有し、革新の時空を醸成した。日本陶器は、この時空で革新環境に触発され、京都と東京、瀬戸と九谷の間で、内外市場の変遷に応じて、輸出用陶磁器生産から洋食器生産、砥石生産、ファインセラミックス生産と、製品を革新した。そして、衛生陶器の東陶製陶、碓子の日本碓子、航空機、自動車プラグの日本特殊陶業等を分離独立させた。これはトヨタ自動車等と共

に1985年に日本ファインセラミックスセンターを開設した。これは、また、半導体基盤生産を美濃や常滑、四日市万古の周辺産地を超えて展開させた。日本陶器は生体的医療機器、日本碍子は浄化環境関連機器と、現代産業革命の両輪をなす厚生・環境産業の旗手をなし、ノリタケの森における美術館、手書工芸工房に表徴される藝術と技術統合の場所を創業地に培った。日本陶器でも、時流に先んじた創造、研究の精神が、企業文化を貫き、企業風土を培った。部材生産を通じた産業構造的結合だけでなく、企業文化を通じた風土享有で、ノリタケはイタリア村開設に表徴される地域構造的な気風の喚起、風土の励起を行った。さらに、ノリタケは主体的精神の覚醒や状況の励起に配慮し、地場の革新環境を醸成し、両者間での革新の同期、相乗を図り、地場を変動させてきている。

風土文化の深化による地場の変動と時空の変遷は、伝統的大規模陶磁器産地をも革新した。トヨタ自動車と同様に

東北大学の研究、人材に依拠し、筑波の電子総合研究所より人材を導入し、山寿セラミックスは情報産業革命の成熟期に合せ、電子デバイスを開発している。この他にも、医療機器や環境機器に進出した地場産業もあり、近接した豊田中央研究所もファインセラミックス研究、環境技術、厚生技術開発の拠点をなしている。他方、瀬戸東部の長久手に隣接した愛知県陶磁資料館に凝集された技術と藝術は、隣接地で開催された日本国際博覧会での大物藝術の絵皿をアイコンとして、国際工芸運動を革新した。愛、地球博の会場に近接した愛知県藝術大学には、瀬戸赤津の工人、加藤伸也も教授を勤め、名古屋藝術大学を誘因する布石をなし、風格の経済を育む風土を醸成している。磁気浮上式電車、リニモの沿線地帯には愛知工業大学や愛知県立大学等も展開する。ここは愛・地球博の英国館が特に強調した生命と生体、生態と環境について生物にも学び、自然の摂理、人間の倫理を重んじた超自然技術開発の殿堂、メッカ

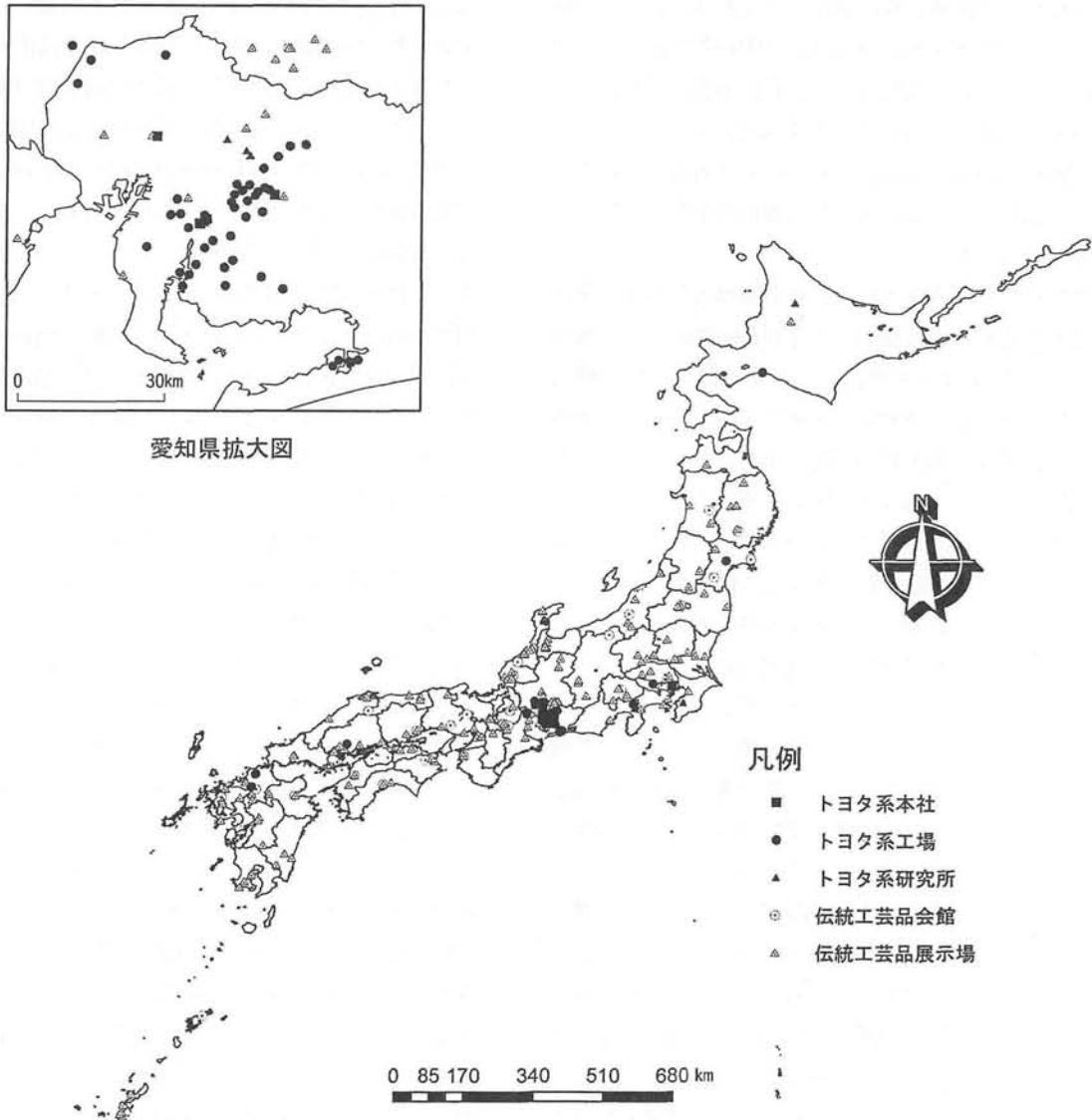


図5-1 トヨタ自動車関連の施設と風土文化産業の拠点

出所：著者作成

を目差し、革新思想、文化を育んでいる。

生命・生態、厚生・環境に留意した超自然技術・未踏科学開発の核心は、筆者が委員長を務めた1983年の矢作川ニューライフシティの先端技術地域計画で育まれた。計画の実践は、1971年以来の、明治用水組合の故内藤連三が中心となった矢作川沿岸水質保全対策協議会を媒体にした矢作川流域浄化の住民運動と元愛知教育大学学長故伊藤郷平が流域市町村長を束ね、定住圏計画の実施母体となった矢作川流域開発研究会を両輪としなされた。その基には自然の摂理と自然の叡智を重視した風土があった。また、直接的関連はまだ薄い、名古屋大学より分離独立した岡崎共同研究機構が分子生物学、生命科学の殿堂、アイコンとして、名古屋・岡崎の中間地、刈谷に愛知教育大学が移転した跡地に立地している。この革新思想は、筆者が参画し、命名した名古屋の志段味ヒューマンサイエンスパークや岡崎共同研究機構で共同研究を行った世界的超音波科学の権威、本多電子前社長の故本多敬介を媒体に、1992年創設のサイエンスクリエート21や奉職した豊橋科学技術大学に移転された。この風土文化の深化が地域を革新し、ナノテクノロジーの樹研工業や眼科機器のニデック等、厚生・環境に留意した国際中堅企業族生の苗床を培った。さらに、これは浜松テクノポリスを推進した本多の母校の静岡大学工学部を介し、ヤマハ発動機、本多電子同様にトヨタ自動車の資本参加のあった光科学の旗手、浜松ホトニクス等に象徴される、光、音、水、生、空の未踏科学、技術革新の時空を育んだ(図5-1)。

上述したように風土文化の深化は、地場を変動させ、次元を転換し、革新場所を励起し、場所を変換し、時空を変え、革新機構を作動させて、産業地域を革新してきている。

本論は、2005年に小生の退官に際して、新旧の学長が主催し、小生が座長を務めたパリのソルボンヌ大学での「地理学の概念と思想」とこれに続き、その根幹をなす恩師で、パリ大学高等研究所所長、オックスフォード大学地理学部長を兼任したゴットマンの手紙、原稿、資料を納めたシラク・ビブリオテーク主催の「ゴットマンの思想」でのパネルディスカッションでのパネラーとしての議論、最終日の国際地理学会、フランス地理学会、国際居住会議主催の「メガロポリスのオービットとアイコン」での総括発表を踏まえ、風土文化の概念、深化・革新の機構を纏めた、ユネスコ大使公邸での晩餐会での講和に加筆したものである。招請いただいたソルボンヌ大学ピット学長、ブソー前学長、国際地理学会会長・ヴァレガジェノバ大学副学長、国際居住会議議長でエキスティクスの編集長ソモボラス、会議を総括されたムスカラ前ローマ大学都市国土計画研究所所長、バステイエ元フランス地理学会会長、退官記念の晩餐会を

開いてくださった佐藤大使、オタワのラポンス、UCLAのアグニュー、パークレイのフーソン、ソルボンヌのクラブール教授を始め、多くの旧知の友人に深謝したい。本論は、また、2005年のユネスコ主催の「Science City Governance」でのLocus: Civilization and Regional Renaissanceの発表の一部に加筆したものでもある。会議を総括し、招請いただいた呉前忠南大学副学長及びユネスコ科学政策局代表のYoslan Nurの長年に亘る友情に、作図に御協力いただいた車九州国際大学非常勤講師に感謝したい。本論には、科学研究費補助金 基盤研究C-2「産業地域の革新と風土文化の深化」(研究代表者 宮川泰夫)の一部を使用した。

本論を奉職以来単身赴任の身で、心労も一方でなく初代志垣研究科長、刀田、花田教授に次いで不慮の病で彼岸に旅立たれた日下みどり教授の霊に捧げ、ご冥福を祈りたい。

参考文献

- 玉城哲、旗手勲(1974): 風土—大地と人間の歴史—, 平凡社選書 30 平凡社 332p
- 和辻哲郎 (1970): 風土—人間的考察—岩波書店 253p
- 矢沢大二編(1979): 三沢勝衛著作集 風土論 (I) (II) 郷土地理研究, みすず書房 235p, 241p
- 宮川泰夫(2002): 地域の創成と文明の開化 大明堂 438p
- Miyakawa. Y. (1981): Evolution of Japan's Industrial System EKISTICS 48 273-280
- Miyakawa. Y. (1987): The metamorphosis of Japan's Industrial System and Development of International Division of Labor in International Economic Restructuring and Regional Community edited by W. B. Stohr Avebury pp. 148-164
- Miyakawa. Y. (1993): Nagoya: The core of Japan's Global Manufacturing Industry in Japanese Cities in World Economy edited by K. Fujita & R.C. Hill Temple University Press pp. 159-174
- Miyakawa. Y. (1996): Japan's Technopolis: A Model for Frontier Development in East Asia in Frontiers in Regional Development edited by Yehuda Gradus and Harvey Lithwick Rowman and Littlefield Publishers 259-277pp.
- Miyakawa. Y. (1998): Globalization and localization of the orbit in geography Geo Journal 44, pp. 115-122
- Miyakawa. Y. (2001): Local Initiative in Regional Development and Global Transformation within the Japanese Orbit in New Regional Development Paradigms edited by Asfaw Kumusa and Terry G. McGee Greenwood Press pp.173-195